

第一 問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

鏡像を自己として認知できるようになるには、生後一年半～二年程度の時間がかかるといわれている。B・アムスターダム^イの古典的研究によると、生後一年ごろまでの乳児は、鏡に映った身体を他者として知覚している。鏡に向かって手を伸ばし、微笑^{ほほえ}みかけ、頬ずりをするなど、鏡像を遊び相手として扱うような振る舞いを見せるのである。ところが、一四ヵ月ごろから振る舞い方に変化が起こり始め、鏡像を見て感嘆したり困惑したりという揺らぎのある反応を見せつつ、全般的に鏡像を避ける行動が増え、二〇ヵ月ごろまでこの傾向が続く。この時期を過ぎると、二四ヵ月に向かって鏡を見ながら自己の身体をタンサク^aする自己指向行動が増えていく。

生後間もない乳児にとって、自己の身体は、空腹や渇きのような内受容感覚、身体を動かすと筋肉や腱^{けん}で受容される固有感覚によつて主に構成されており、視覚的な関心を惹く対象ではない。むしろ乳児が視覚的に惹きつけられるのは、視野に登場する母親や父親の顔である。M・ジョンソンらの研究で知られるようになったとおり、新生児は各種の対象の中でも人間の顔を好んで注視する傾向がある。また、この傾向は実物の顔だけでなく、目・鼻・口などのパーツがあり、それが人の顔のように配列されている絵でも確認することができる。つまり、生後一年ごろまでの乳児にとって、身体に由来する体性感覚的な情報と、外界に由来する視覚的情報とは分断されており、いまだ統合されていないのである。鏡に映る視覚的な全身像を、「ここ」にある体性感覚的な情報と結びつけることができるようになるのに、生後二年近い時間がかかるということである。

両者の統合過程において、何が起きているのだろうか。鏡像認知が成立する途上の移行期に、鏡像を回避する行動が見られるところが興味深い。これは別の研究でも確かめられている。時期がややずれるが、R・ザゾによると、一七ヵ月ごろから鏡を前にす

る乳児には忌避反応が見られるという。困ったような表情をしたり、鏡像に対して顔をそむけたり、鏡の前でフリーズしたり、鏡像から遠ざかるうとしたり、といった反応である。すべての乳児になんらかの忌避反応が見られ、平均的に三カ月～五カ月程度続くという。

鏡に対する回避的な反応が生じる以前、乳児にとって鏡像は「他者」として経験されている。鏡の中の身体は、視覚的には「そこ」に見えているが、「ここ」で生じている身体由来のさまざまな体性感覚とは結びつかない。これに対して、鏡像認知ができるようになった乳児にとって鏡像は「自己」として現れる。視覚的に「そこ」に見えている像が、「ここ」で生じている身体由来の体性感覚としっかりと結合している。手を上げ下げすれば、「ここ」で豊かな運動感覚が生じると同時に、「そこ」に見えている手も上がったりがつたりする。運動感覚と視覚像は緊密に連合している。鏡の中に自分が見えるとは、このような経験である。

移行期の乳児にとっては、鏡像はどっちつかずの中途ハンパな存在だろう。鏡を見ると他者のような視覚像が映っているにもかかわらず、それがこちら側の「ここ」で生じている体性感覚と奇妙にも連動しており、どのように受け止めてよいのかいまだ正解が見当たらず、これが落ち着きのない回避行動を引き起こす原因になっているように見える。移行期の落ち着かなさに決着をつけるには、鏡の中に見えている視覚像が自己自身の視覚像であることに気づき、受け入れるしかない。これはどのように可能になるのだろうか。

この点に本質的に関連しているのが、G・ギャラップによるチンパンジーの鏡像認知研究である。チンパンジーは鏡像認知ができる数少ない動物の一つであるが、彼の報告によると、群れから引き離して単頭飼育したチンパンジーは鏡像認知ができるようにならなかった。チンパンジーの鏡像認知を試す際には、ヒタイや耳のように鏡を見ないと確認できない身体部位にマークを付け、鏡を見せてそれに気づくかどうかを試す「マークテスト」と呼ばれる手法を用いる。ギャラップが報告するところでは、単独で飼育されたチンパンジーは群れで育ったチンパンジーとは違ってマークに関心を示さず、鏡を見ながらマークに手を伸ばす自己指向行動も見せなかった。

ここから推測できるのは、鏡像認知が単に「ここ」で生じる体性感覚と「そこ」に見える視覚像との連合だけで成り立ってはいない

ということである。群れで育ったチンパンジーは、「他者の身体」に囲まれて育っている。チンパンジーは成長の過程で、「自己から見た他者の身体」と「他者から見た自己の身体」を互いに交換することで、自己の身体が外的な視点から見るとどのような見えるのかということを学習するのである。群れで育ったチンパンジーは「他者から見た自己の身体」を最初から知っているからこそ、鏡を初めて見たとしても、そこに映っている身体の像が「外的視点から見た自己の身体」であると気づくことができるのである。

鏡像認知は、体性感覚と視覚を結びつける単なる連合の問題には還元できない。単独で飼育されたチンパンジーにとっては、そもそも両者を結びつける動機も必然性もないことに注意しておこう。人間も同様である。他者とともに育つ乳児にとって、他者にケアされるという身体的相互作用は決定的に重要である。自己の視点から他者の身体を見るだけでなく、自己の身体が他者の視点からどのように見えるのかに気づくとき、「ここ」で生じている体性感覚と「そこ」に見えている視覚像とが有機的に連合するのである。この過程はとりわけ、他者の身体にある「顔」が自分の身体にもついていることに気づくうえで決定的に重要である。

メルロ＝ポンティも、発達心理学者H・ワロンの研究に沿って鏡像認知に言及しながら、次のように指摘している。

彼「幼児」にとっての問題は、身体の視覚像と身体の触覚像が空間中の二点に位置しているのに実際には一つに過ぎないと理解することではなく、鏡の中の像が彼の像であり、他人が見ているところの彼の像であり、他の主体に対して彼が提示している外観であると理解することにある。この総合は、知性による総合ではなく、他者との共存に関する総合なのである。

ここでの文脈に沿って言い直そう。鏡に映る身体の姿を「自己の身体」として認知できるようになるには、たんに体性感覚と視覚を連合するだけでは十分ではない。「ここ」にある自己の身体が、「そこ」にいる他者の眼から見てどう見えるのかに気づくことが必要である。鏡像認知はたんに多感覚統合の課題ではなく、「見る―見られる」という関係において他者と共存することを学ぶ経験に他ならないのであり、その意味で私たちの身体イメージには他者の眼差しが刻印されているのである。この点が明らかになったことで、自己身体の「付き合いくさ」の源泉に一步近づくことができたように思う。

（田中彰吾『身体と魂の思想史——「大きな理性」の行方』による）

〔注〕 ○メルロ＝ポンティ——Maurice Merleau-Ponty（一九〇八～一九六二）。フランスの哲学者。

設問

(一) 「鏡像を遊び相手として扱うような振る舞いを見せる」(傍線部ア)とあるが、それはなぜか、説明せよ。

(二) 「鏡像認知が成立する途上の移行期に、鏡像を回避する行動が見られる」(傍線部イ)とあるが、それはなぜか、説明せよ。

(三) 「そこに映っている身体の像が『外的視点から見た自己の身体』であると気づくことができる」(傍線部ウ)とあるが、それはなぜか、説明せよ。

(四) 「私たちの身体イメージには他者の眼差しが刻印されている」(傍線部エ)とはどういうことか、本文全体の趣旨を踏まえて一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ(句読点も一字と数える)。

(五) 傍線部 a・b・c のカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

a タンサク b ハンパ c ヒタイ

第二 問

次の文章は『撰集抄』の一話である。これを読んで、後の設問に答えよ。

昔、御室戸みむろとの法印隆明といふ、やんごとなき智者、もろこしに渡り給はんとて、西の国におもむきて、播磨はりまの明石といふ所になん住みていまそかりけるに、あさましくやつれたる僧アの、来たりて物を乞ふ侍り。さながら赤裸あかはだかにて、糸のこを脇に抱き侍り。人、後先しりさきに立ちて、笑ひなぶりける。あやしの者やと思おほして見給へば、清水寺きよみづでらの宝日上人にていまそかりける。ひが目にやとよく見給へど、さながらまがふべくもあらざりければ、かきくらさるる心地して、伏しまろびて、「あれはめづらかなるわざかな」とのたまはせければ、上人ほゑみて、「まことに物に狂ひ侍るなり」とて、走り出で給ふめるを、人あまたして、取りとどめ奉らんとし侍りけれども、さばかり木暗こくらき繁みが入り給ひぬれば、力エなくやみ侍りけり。

隆明法印は、あまりすべき方なく悲しく覚え給ひて、その事となく、その里にとまり居給ひて、広く尋ねいまそかりけれども、その後はまたも見えずなり給ひにき。さて里の者にくはしく事の有様を問ひ給へりければ、「いづくの者とも人に知られで、この村に住みても二十日ばかりなり」とぞ答へ侍りける。この事オ、限りなくあはれに覚え侍り。何と、げに世を捨てといふめれど、身のあるほどは、着物をば捨てずこそ侍るに、あはれにもかしくも覚え侍るかな。

およそ、この上人はよろづ物狂はしき様をなんし給へりけるなり。ある時は、清水の滝の下に寄りて、合子がふしといふ物に水を受けて、隠れ所をなん洗ひ給ふこと、常の態わざなり。いみじく静かに思ひ澄まし給ふ時も侍るめり。一方ひとかたならずぞ見え給ひし。澄み渡る心の内は、いつも同じさきならねども、外の振る舞ほかひは百ももに変はりけるは、よしなき人の思おもひを、我のみ一方にはとどめじと思しけるにや。

この上人ぞかし、中関白なかのの御忌に、法興院に籠こもりて、暁方あかつきがたに千鳥の鳴くを聞き給ひて、

明けぬなり賀茂の河原に千鳥鳴く今日もはかなく暮れんとぞする

と詠みて、『拾遺集』に入り給へり。明けぬるよりはかなく暮れぬべき事の、かねて思はれ給へりけるにこそ。かの『拾遺集』には円松法印と載りて侍るは、上人の事にこそ。

〔注〕 ○御室戸——現在の京都府宇治市にある三室戸寺。

○ゑのこ——子犬。

○合子——ふた付きの容器。

○さきら——才知。

○中関白——藤原道隆。

○法興院——藤原道隆の父、兼家が別邸を寺としたもの。

○『拾遺集』——三番目の勅撰和歌集。ただし実際には『後拾遺和歌集』に、ほぼ同じ歌が「円松（または円昭）法師」作として載る。

設
問

(一) 傍線部ア・イ・エを現代語訳せよ。

(二) 「かきくらさるる心地」(傍線部ウ)とは、何に対するどのような心情か、説明せよ。

(三) 「この事、限りなくあはれに覚え侍り」(傍線部オ)とあるが、語り手はなぜそのような感じたのか、説明せよ。

(四) 「よしなき人の思ひを、我のみ一方にはとどめじ」(傍線部カ)とはどういうことか、説明せよ。

(五) 傍線部キの歌は、どのようなことを表しているか、説明せよ。

第三問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。ただし、設問の都合で送り仮名を省いたところがある。

人恒^{つね}病^う執^{しつ}着^{ちやく}。然^{しか}亦^{また}不^ふ可^か概^{がい}論^{ろん}。良^よ繇^う学^{がく}以^{もつ}好^{こう}成^{せい}、好^{こう}之^の極^{ごく}名^な着^{ちやく}。

羿^ひ着^し射^{しやう}、遼^{れう}着^し丸^{わん}、連^{れん}着^し琴^{きん}与^よ。夫^そ着^し弈^い者^{しや}、至^{いた}屏^{へい}帳^{ちやう}垣^{げん}牖^{いう}皆^{みな}森^{しん}然^{ぜん}黑^く

白^{はく}成^{せい}勢^{せい}、着^し書^{しよ}者^{しや}、至^{いた}山^{さん}中^{ちゆう}木^{もく}石^{せき}尽^{じん}黑^く、学^{がく}画^が馬^ば者^{しや}、至^{いた}馬^ば現^{げん}於^お牀^{しやう}榻^{たふ}

間^{かん}。夫^そ然^{しか}後^ご以^{もつ}其^{その}芸^ぎ鳴^{めい}天^{てん}下^か而^を声^{こゑ}後^ご世^{せい}。何^{いかん}独^{ひとり}於^お学^{がく}道^{だう}而^を疑^ぎ之^の。

是^{こゝろ}故^{ゆゑ}参^{さん}禅^{ぜん}人^{にん}、至^{いた}於^お茶^{ちや}不^ふ知^し茶^{ちや}、飯^{はん}不^ふ知^し飯^{はん}、行^{ぎやう}不^ふ知^し行^{ぎやう}、坐^ざ不^ふ知^し坐^ざ、

発^{はつ}篋^{けつ}而^を忘^{わす}局^{きよく}、出^で廁^{かへやう}而^を忘^{わす}衣^い。念^{ねん}仏^{ぶつ}人^{にん}、至^{いた}於^お開^{かい}目^{もく}閉^{へい}目^{もく}、而^を觀^{くわん}在^{ざい}

前^{ぜん}、摂^{せつ}心^{しん}散^{さん}心^{しん}、而^を念^{ねん}恒^{こゝろ}一^{いつ}。良^よ繇^う情^{じやう}極^{ごく}志^し專^{せん}、功^{こう}深^{しん}力^{りき}到^{いた}、不^ふ覺^{かく}不^ふ知^し、

忽^{たち}入^り三^{さん}昧^{まい}。亦^{また}猶^{なほ}鑽^{きん}鑢^{りよ}者^{しや}、鑽^{きん}之^の不^ふ已^ま而^を発^{はつ}焰^{えん}、煉^{れん}鉄^{てつ}者^{しや}、煉^{れん}之^の不^ふ已^ま

而^{スガ}成^レ鋼^ヲ也。

概^{シテおもんばかりテ} 慮^ニ 其^ノ着^{センコトヲ} 而^{イウ} 悠^{イウ} 蕩^{タウ} 蕩^{タウ}、如^ニ水^ノ浸^{スガ}石^ヲ、窮^{ストモ}歷^ス年^{ゴフヲ}劫^ニ、何^ノ益^カ之^レ有^{ラン}。

是^ノ故^ニ執^フ滯^ニ之^ハ着^ハ不^{カラ}可^ル有^ル、執^フ持^フ之^ハ着^ハ不^{カラ}可^ル無^{カル}。

(雲棲株宏『竹窓二筆』による)

〔注〕

○羿着^レ射、遼着^レ丸、連着^レ琴——羿は弓、遼はお手玉、連は琴の名人として知られる。

○弈——囲碁。

○牖——まど。

○森然——びっしりと。

○牀榻——ベッド。

○学道——ここでは仏道を学ぶこと。

○覲在^レ前——仏などを観想すること。

○三昧——深く集中した境地。

○鑢——火打石。

○慮——心配する。

○蕩蕩——ゆつたりと気ままなさま。

○年劫——長い年月。

設
問

(一) 傍線部 a・b・d を平易な現代語に訳せ。

(二) 「何独於_ニ学道_一而疑_レ之_一」(傍線部 c) を、「之」の内容がわかるように、現代語に訳せ。

(三) 「如_ニ水浸_レ石_一」(傍線部 e) とはどうか、簡潔に説明せよ。

(四) 「執滞之着不_レ可有_一、執持之着不_レ可_レ無_一」(傍線部 f) とはどうか、本文の趣旨を踏まえて説明せよ。

第 四 問

次の文章は、一九五六年に発表された小説である。これを読んで、後の設問に答えよ。

小柄な痩せた男で、莫蔭^{もかげ}でくるんだ苗木を背中にまっすぐに背負って、庭に立つと、
「ごめんください」

と、云^いって汚れた帽子をとって腰をかがめた。その、ごめんください、という挨拶が、女性的な声だけどこか格式張^{きしき}っていた。顔つきはその声のように細おもての柔和な、むしろ伏^ふ目がちの弱気な表情だった。

「植木屋でございですが、今日は沈^{しん}丁^{ちやう}花^げを持^もつてまいりましたが……」

「植木屋さんのの」

しげのが縁^き先^{さき}へ出^でてゆくと、爺^{じい}さんは背中から莫蔭^{もかげ}の包みをおろしてひらいた。

「あら、小さいのね。いくら?」

「二本八十円ですが、二本ありますから、二本買^かつて下^{くだ}されば、百三十円におまけいたします」

「お父さん、どうします。買^かいますか」

そして沈^{しん}丁^{ちやう}花^げを買^かうことになって、それがきっかけで、庭の周囲の七、八本の檜^ひ葉^はも、この爺^{じい}さんが運^はんでくることになった。順吉たちのつもりでは、檜^ひ葉^はは目かくし用にとおもつて頼^{たの}んだのだが、爺^{じい}さんの背負^おつてくるのは、いつも殆^{ほとん}ど一尺ばかりの苗木だった。

「あら、そんなに小さいの?」

と、そのときもしげのは云^いった。爺^{じい}さんは目を伏^ふせ、気弱に、しげのの言葉を聞き流^{なが}して、

「なに、すぐ檜葉は大きくなりますです」

と、答えて、自分で土を掘って植えた。

しげのはお茶を出したり、丁度昼飯ときには、そうめんを分けて出したりした。

たいてい日曜に来るので、順吉もいた。植木屋の爺さんは縁側に腰をかけ、お茶をのむときも、そうめんをよばれるときも、「いただきます」と云つて手にとつたが、その、いただきます、という調子には歌うようなひびきがあつて、ちつとも卑屈なものがない。優しい顔をしている。

一度その姓名を聞いたとき、爺さんが、あんまり立派な名前なので、しげのは爺さんの前身に興味を持ったが、戦争中女房の実家の千葉県に疎開して百姓をやつていたつづきで、今は植木を売って歩いているのだ、ということしかわからなかった。伊志野剛直という、いかめしい姓名には似合わず、小柄のひよこひよここと歩く苗木売りだが、そのもの云いだけ、どこか変つてゐる。しかも、順吉はその苗木屋を自分より年上とおもつていたが、見かけよりはずっと若く、まだ四十代で、小学生の女の子があるという。

しげのは心易くなり、今度は少し大きい樹を持つてきてくれ、と不満そうに云うのだが、そんなとき、伊志野剛直は、ちよつと悲しい表情をするような気がした。

「はい」

と答えて、伏目に前を見つめる。順吉は女房にばかり応対させて、自分はあまりものを云わなかったが、苗木屋の表情の悲しげなのに気づくのは彼だった。

しげのに云われても、その苗木屋のその次に持つてくるのはやっぱり一尺足らずの苗木ばかりだ。値が安いので伊志野の持つてくる度に、順吉の家では買い、小さな植木ばかり、雑然と植えた。木犀、乙女椿、くちなし、ざくろ、つつじなど。しかし伊志野剛直は、格式張った口調で、ときには自分の苗木に鹿つめらしい説明をすることもある。

「楓には、板屋楓、高尾楓などありまして、これは高尾でございます。紅葉のもみじと申しますは、この高尾楓の紅葉が、いち

ばん美しいので、その名をよぶようになりまして、城州は高尾山に多いところから、高尾楓と申します」

「ああ、なるほどね」

しげのが対手^{あいて}上手なので、伊志野は、この家へ来ると、安心したように縁側に腰をおろして、ときには、持って来た苗木を買ってもらえないときでも暫く^{しばら}休んで行ったりした。帰るときには、

「あ、お邪魔をいたしました。また、お願いいたします」

と、ゆつくり挨拶をして、莫蔭包みを背負って、ひよこひよこと帰ってゆく。両方でなじんで順吉の家では、次ぎ次ぎにその庭の殆どが伊志野剛直の苗木で埋まっていた。しかしその庭は残念ながら腰より高い樹木はないのだった。

が、順吉は、二年ばかりの間に、近所に新しく建った住宅の玄関などが、ちんまりと植込みのできているのを、朝夕見ているうちに、わが家の前が依然としてむき出しなのを、少々もの足りなくなっていた。そして遂^ついにあるとき、三千円ばかりはずんで、これは本職の植木屋に頼んで、冬も落葉しない樹をといて注文で、檜^かの木、柃^{ひいらぎ}などを植えることにした。そのとき順吉は、伊志野剛直をおもい出して、彼に^ア気の毒なおもいをさせるような気がした。三千円といえば苗木屋の二年間に運んだ植木代の倍であった。

その日曜日、本職の植木屋は、いかにも本職らしいでたちで、若いものひとりを使って、軒まで達する高さの檜の木をリヤカーで運び、高声の早口で配置の位置を指定したりしながら、深く土を掘った。檜の木には支えの添え木も二本つけて縄で結^{ゆわ}き、その下には柃や、つくばねうつ木や、黄楊^{つげ}を植え、片方には、おまけだといって篠竹^{しのだけ}も植える筈^{はず}だった。順吉は馬穴^{バケツ}の水を運んだりして手伝っていたが、彼が内心で気づかっていたとおり、丁度その最中に、苗木屋の伊志野剛直が、いつものように莫蔭包みを背負ってやって来たのである。

「あ、ごめんください」

伊志野は、本職の植木屋には顔を合せず、いつものように縁先きに来て腰をおろした。しげのもやはりいつものようにお茶を出して、

「おじさんに大分植えてもらいましたけどね、玄関さきだけ、あんまり淋^{さび}しいから、大きな樹を一本入れるんですよ」と、言訳をした。

「は、お立派になります」

「そんなにはねえ、お金をかけないから」

さすがにその日は莫^も蔭^{いん}を解かず、

「また、お願いいたします」

と立った。

「ええ、また、来て下さいね。今日はすみませんでした」

順吉の方は、苗木屋に顔を合わせることができないで、隠れるようにしていた。順吉にはそんな気の弱いところがある。気が弱いというよりは、伊志野に対して、いささかの裏切りをしたような、自分を責めるおもいさえ彼は感じていた。

植込みの終った玄関先きに、彼は満足しながらも、その夕方、しげのと膳^{むか}に向ったとき、

「あのいつもの植木屋の爺^いさん、厭^{いや}な気がしただろうねえ」

と、云っていた。しげの方の方は割り切ったように、

「^イだって、あのおじさん苗木ばかりですもの、仕方がないですよ」

「また、来るかね」

「もう、うちの庭も広くないもの、植えるところもないですよ」

ところが、伊志野剛直は、それっきり、この家の庭先きに姿を現わさなくなったのである。もうそれから一年経^たつ。^ウ苗木屋の植えた囲いの檜葉は倍の丈に伸びて、結構、形を成した。

大田順吉は、苗木屋の伊志野剛直が、この庭に、というより、順吉夫婦に親しみを寄せていたとおもう。だから、順吉が本職の植木屋を入れたとき、彼を裏切るような、うしろめたさを感じた。それ以来、伊志野剛直がこの庭に姿を現わさない、ということ

で一層順吉は、彼を傷けたおもいが消えない。

伊志野剛直はいく度、しげのが、もう少し大きい樹を、と云つても、苗木しか持つて来られない事情があつたのであろう。本職の植木屋とゆき合つたとき、彼は、だから引け目を抱いたのにちがいない。

だが、それ以来ばつたり姿を見せない、ということは、伊志野剛直の誇りなのか。

今日順吉は、勤め先きの家具製造店で厭なおもいをした。

彼は、請求書の計算をまちがえたのである。若い店員がずけずけと店主の前でそれを云い、順吉は一言もなかった。こんなとき、順吉は自分の年齢を引け目に感じた。ふつと心のどこかで、姿を現わさない苗木屋の誇りをおもい出していたような気がする。

「あの、植木屋の爺さん、どうしたかね」

と、順吉はしげのに声をかけた。

「あれつきり来ませんね。やっぱり苗木売つて歩いてるんでしょにね。まだ小学校にゆく子がいるといつてたけど、少し變つてましたよ、ね」

しげのには、伊志野剛直の誇りはわからないらしい。大田順吉は黙つたまま、あの苗木屋に対する自分の裏切りと、そして再び姿を見せぬあの苗木屋に、同感とも羨望ともつかぬ、なつかしさを、じいつと感じて立っていた。

(佐多稲子「狭い庭」による)

〔注〕 ○一尺——約三〇・三センチメートル。

○城州は高尾山——山城国(現在の京都府南部)の高雄山。

設問

(一) 「彼に気の毒なおもいをさせるような気がした」(傍線部ア)とあるが、それはなぜか、説明せよ。

(二) 「だって、あのおじさん苗木ばかりですもの、仕方がないですよ」(傍線部イ)とあるが、なぜそのように言ったのか、説明せよ。

(三) 「苗木屋の植えた囲いの檜葉は倍の丈に伸びて、結構、形を成した」(傍線部ウ)とあるが、ここからどのようなことがうかがわれるか、これまでの経緯を踏まえて説明せよ。

(四) 「同感とも羨望ともつかぬ、なつかしさ」(傍線部エ)とはどのような心情か、説明せよ。